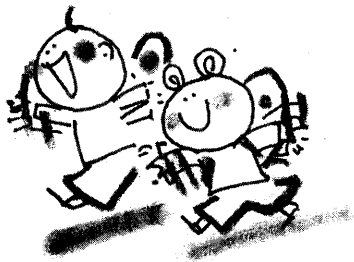


## 保育の現場から

# 心弾む日々を重ねて

阿蘇亜希



## 三歳児の世界

「おぼけが出たー!」

遊戯室にある大きな扉の向こうのうわさを聞きつけて、子どもたちは自分のお道具箱をのぞき「これだ!」と思うお面を選んでかぶると、たちまち勇敢な顔つきになって勢いよく保育室を飛び出していきます。広告の紙やブロックで作った武器、魔法のステッキを手にして向かう子どももいて「この武器は

ここから雷が出るんだ!」「私は魔法でやっつける!」と意気込んでいます。遊戯室に向かう途中、私の変身したお面では太刀打ちできないと思うのか「先生! ぼくのウルトラマン強いから、これかぶって!」と、自分のお面を貸してくれる子どもたちが、よく考え、心を動かして遊んでいることに私自身が気づかされ、驚くこともたびたびです。

新幹線になって園内のあちらこちらに連れて行く

てくれたり、チョウチョの羽を付けておいしい蜜を  
探しに出かけたり、消防士になってホースを手に出  
動したりと、好きなものに変身すると子どもたちは  
活き活きと表現し始めるのを感じます。また一つの  
ブロックが食べ物にも薬にもカメラにもなったり、  
壁に絵を貼りテレビに見立ててじっと観ていたり、  
三歳児の思いもよらない発想のおもしろさに感動  
し、自由自在な遊びの世界に心弾ませる毎日です。  
そうして子どもたちの思いを受け、私も共に楽しみ  
ながらも、真剣に遊ぶ日々を送っています。

### 遊びが発表会に

三学期が始まり、この冬の厳しい寒さの中、なぜ  
か子どもたちはカップの水（実際は空っぽです）に  
お好みのシロップをかけてくれるかき氷屋さんを保  
育室で繰り返し楽しんでいました。

そんなある日、うれしいタイミングで雪が降り、

子どもたちは「待っていました」とばかりに大喜びで  
テラスでかき氷屋さんを始めました。真っ白な雪を  
配達したり、さまざまな味を開発したり、友達と合  
体させて山盛りかき氷を作ったり、思いがけず降っ  
た雪という自然の恵みで楽しさは大きく広がしまし  
た。それからというもの、雪は溶けても探検に出か  
けると「あ！ ここにはしょっぱい水がある！」  
「しぶい水もあるよ！」「砂味もあるぞ！」と、さま  
ざまな水を見つけることを楽しみました。

すると、いつしかなかなか見つからない「ひみつ  
の水」を探して探検するようになっていきました。  
ある子は「甘いんだよ」と話し、ある子は「キラキ  
ラしているんだよ」と言う、それぞれのイメージが  
こうして遊んでいるうちに少しずつみんなの共通の  
イメージになっていきます。そうして子どもたちの  
遊びの中で繰り返し広げられる思いを拾っていくうち  
に、こんな日常の姿を「のぞみっこ発表会」という

生活発表会のステージで表現できたら、と思うようになりました。

### ペンギンさんからの手紙！

そんなある日、子どもたちのもとに手紙が届きました。手紙には「ぼくは冷たい氷が大好きさ！」とあり、手紙の主は「かき氷屋さんをしたり、氷を探している君たちだけにいいことを教えてあげる」というのです。みんなで秘密を共有するようにヒソヒソ声で読み続けます。それは「遠くのある所に甘くてキラツとしたひみつの氷があるよ」というものでした。初めはポカンと不思議そうに聞いていた子どもたちも、次第に何が起きているのがわかってきたのか、一人が「えー！ 誰なのー!？」と言うと、周りの子どもからも口々に「ペンギンさんからじゃなーい!?」という声があがりました。子どもたちの言うペンギンさんとは、先日読んだ『やまからきた

ペンギン』（佐々木マキ／作・絵、フレールベル館）という絵本の中に出てくる、かき氷が好きなペンギンのことでした。その日から、毎日子どもたちのもとに手紙が届くようになりました。

みんなで探検のときに使っていたものによく似た、海やおぼけ線路が描いてある地図が届いた日には、子どもたちは地図とにらめっこしながら「この海を通って行けばいいんだね!」「この温泉でひと休みしようよ!」と会話も弾んでいました。また「海を渡るなら泳げた方がいいよね!」「ぼくは早く行ける新幹線になる!」と何に変身していくか自然と思いが膨らんでいる子どもたちでした。そんな子どもたちと思いをめぐらせていると私自身もわくわくし、一緒になってその世界へ引き込まれていきます。

このペンギンさんからの手紙は、さらに遊びの楽しさが深まり、みんなで少しでもイメージが共有できたら、という思いで、悩みつつも私がペンギンに

なりきって書いたものでした。どんな表情でどんな反応が返ってくるのだらうと、一人ひとりの姿を思い描きながら書くことは私にとっても楽しいことでした。また翌日には、子どもたちと届いた地図を持ってお帰りの前に探検に出かけることにしました。自然と足取りがそつとそつと……になっていくことに、みんなでドキドキする気持ちを共有しているのを私自身も感じました。

## いざ出発!!

こうして、ペンギンさんからの手紙でさらに広がった生活を楽しみながら、発表会当日はやってきました。

遊んでいた世界から自然に入り込めるように、海を渡りペンギンさんに会いに行くことにしました。思い思いのお面を付けた子どもたちですが、たくさんの方のまなざしを受ける初めてのステージでは、

それぞれにさまざまな反応がありました。思いきりステージを駆け抜ける新幹線のA君や、ガタンゴトンと手で車輪を表現してやってくるSLのB君や、這いつくばってのっそり出てきたクワガタのC君のように普段通りになりきって表現する子もいれば、戸惑いの表情で、友達の手をぎゅっと握ってきたDちゃんや、恥ずかしさを紛らわそうと友達にちょっかいを出しながらステージに立つE君など、一人ひとりの気持ちが手に取るように伝わってきました。それでも、友達と一緒にいうことに少しづつ安心感を覚え、次第に自分らしく表現するようになっていく様子も垣間見られます。

海を渡る場面では、これまで初めてのことに一歩を踏み出すことが難しかったFちゃんが先頭になり、四つんばいになって海をどんどん泳ぎだしました。それに続いて、大きなアクションで高く飛んで渡るヒーローや、橋があると見立ててぴゅーっとス

ピードを上げて渡りきる新幹線や、羽を広げて飛んで渡るクワガタなど、それぞれの表現が自然に出て徐々に光っていきます。そして、最後に訪れた温泉では、みんながステージにしっかりお尻を着いて肩まで浸かっている中、「ぼくは電車だから温泉には入れないんだ」というG君は後方で立っっていて、こんな場面からもこだわりをもってなりきっていることが感じられました。そんな一人ひとりの思いを感じながら、いよいよクライマックスです。

ここからは当日のみのお楽しみで、子どもたちは何が起るかわかりません。みんなで声を合わせて「ペンギンさん」と遠くへ呼びかけます。子どもたちの声が遊戯室いっぱいに響き渡ると、空の向こうにぼんやりとペンギンの姿が現れてきました。これは保育者がいろいろと考えた末、スライドで壁にペンギンの姿を映し出して登場させました。その間、時間が止まったように言葉もなく遠くを眺め続ける子



▲「ペンギンさん！」発表会にて

どもたち。そして空の向こうに吸い込まれるようにゆっくりと消えていくころ、子どもたちは再び「ペンギンさん！」と叫び大きく手を振ったのでした。

## 広がっていく生活

その後、ペンギンさんから手紙とひみつの水を受け取って幕は閉じました。発表会が終わり保育室に戻った子どもたちは口々に「ぼくはりんご味!」「ドーナツ味!」「カルピス味だよ。食べる!」「私のはぞみ幼稚園味! からいよ」と報告をしてくれました。

翌日には、ペンギンさんに手紙を書いてきたH君や「昨日ペンギンさんがかき氷食べる夢を見たの」というIちゃんもいて、それぞれの世界でなお思いが膨らんでいることが伝わってきました。遊びの中でもペンギンさんの家を探しにいく探検や、ペンギンのお家ごっこも始まり、海の水を砕いてかき氷を作って食べたり、また温泉は、子どもたちのアイデアでお家やプールや電車へとどんどん変化していきましました。

発表会という一日は終わりましたが、子どもたちの中では遊びの世界は途切れることなくずっとながっているのです。発表会が終わっても、時折、空を見上げて「ペンギンさん!」と呼びかけ、遠くの空を眺めている子どもたちの姿からもそのことは伝わってきました。発表会は当日のためや見せるためではなく、遊びの流れの中の一コマとなり、その前後の生活がつながっていくことを大切にしたいと思えます。さらに子どもたちが心弾む日常を積み重ねることに意味を見いだしていきたいです。一人ひとりがさまざまな思いを抱えている子どもたちが、みんな「ぎゅっ」と一つになる瞬間を味わえたとしたらうれしいことです。三歳児の今、一人ひとりがイメージを広げ、伸びやかに自分を表現し、いろいろな感情をたっぷり味わう経験を重ねてほしいと改めて感じました。

(埼玉県 浦和のぞみ幼稚園)